

## ■ほまれさんがショタに催眠堕ちする話

『催眠術を受けたことに気付かない、あるいは否定する』  
『触れられたら極度に発情。身体は言われた通りに動いてしまう』  
『精神はそのまま。言葉では抵抗可能。ただし絶頂するごとに抵抗力を失う』  
『嫌がりはするけど、実力行使も逃走もできない』  
『この催眠は忘れる』

【あの時はありがとうございました！】

「ん？ ああ、あの時の」

突然話しかけてきた年下の少年。彼は以前、ほまれが公園を独占しようとするグループとのバスケ勝負で助けてあげた子たちの一人だ。

その時のお礼を言いに来たのだが、それだけでないようだ。

ほまれの一線級の運動能力、そして美貌に彼は惚れ込んだらしく、少し迷った後に真剣な眼差しを向けてきた。

【それで……ほまれさんに惚れました！ ぜひつきあってください！】

「あー……悪いんだけど、わたし今は誰かと付き合うつもりないんだ」



ほまれは有名かつ美人というのもあり、告白されることも何度か経験済だ。

だが現在、ほまれはそういったものに興味がない。

性欲自体は年相応にあるが、異性交遊はどうも気が乗らないのだ。

いきなりの告白、ほぼ初対面同然というのもあり、ほぼ即答で拒否するが……

少年はどこか軽薄に見える笑顔のまま、あるものを取り出した。

五円玉と、穴に絡めた糸。至極シンプルな振り子だ。

図工の授業で使ったのだろうか、などと思っていると、少年はそれを揺らして再びほまれに迫る。



【まあそんなこと言わず、“突” き合ってみましょうよ】

「……聞いてた？ ていうか何それ、催眠術のつもり？」

(なんか面倒なヤツに絡まれたね……もっとハッキリ言っておくか)

「わかった。付き合うよ」

(……………っっ?!)



テレビで、あるいはごっこ遊びで見た催眠術。  
それを髭髯とさせる少年の動きに、ほまれは呆れつつ再度断ろうとしたが……  
なぜか次の瞬間、口が勝手に告白を了承していた。

【やったー！ よろしくね、ほまれさん♪】

「ちょ、ちょっと待って！ 今のは口が滑って……こら、なにしてんの！ さわらないで！」

理由はわからないが、自分の意図とは逆の言葉が出てしまった。  
まさか本当に催眠術が使われるはずもなく、少年の行為に同様して口が滑ったのだろう。  
気を良くして近寄り、触ろうとしてくる少年をもう一度拒絶するが、少年がまた何やら呟いた途端。

【触られることを受け入れ、ソッコーで悦んでアへる】

がしいっ♡

「あひっ♡♡ それ♡♡ 気持ち良っ♡♡ ちが……あひいいっ♡♡」

ほまれの身体が自由を失い、少年の手を躲せない。  
そして胸を遠慮なく揉まれ、再び意図にそぐわない反応……  
それも口が滑るところではない、不自然極まりない性的興奮を見せてしまった。  
普段では有り得ない、意識を無視した肉体の昂ぶり。  
それを体感し、ほまれは確信する。少年が本当に催眠術のような『何か』を使ったのだと。

「んっ……まさかアンタ、クライアス社の……？」

また何かおかしなチカラでも、あ♡♡ 使ったんでしょ……っっ♡♡」

【いや今見たでしょ、コレで催眠術をかけたんだよ】

「ふざけないで♥ そんな五円玉で♥♥ わたしが催眠なんか♥♥」

ぎゅむっ♥

「んおっ♥♥♥」

(う、うそっ♥♥♥ 催眠になんかかかってないのに♥♥♥ 触られただけで♥♥♥ イッ……………っっっ♥♥♥)

クライアス社が使うような不思議な能力を催眠術と言い張る少年。  
実際には催眠術などではないはずだが……なぜか身体は少年の言葉のままに反応させられ、  
なんと胸への愛撫だけで絶頂してしまう。

【気持ち良くなってくれてよかった♪ じゃ、早速だけど今からウチにいこっか♪】

「ま♥♥ 待って…………♥♥ あ…………っ♥♥」

こうして、ほまれは少年と『付き合う』ことになるのだった……



少年の自宅。

なぜか逆らえず、言われるが儘に付いてきてしまった。

付き合っている男の家に来る……しかも相手がいきなりセクハラをしてくる輩となれば、  
何をされるかなど大まかに想像できてしまう。

嫌なはずであり、実際に嫌悪を言葉にできているのに、

やはり不思議な能力のせいかな、家を出ることも少年から離れることもできないでいる。

「なに…………する、つもりよ♥ いい加減こんなこと、やめて…………わたしを自由にしなさいっ♥」

【まあまあ、悪いようにはしないからさ】

単純な体力、運動能力ならばプリキュアに変身するまでもなく圧倒できる相手。

にも関わらず手が出せない苛立ちも言葉に乗せてぶつけるが、

少年はへらへらとしたまま考えた後、またも脳に響いてくるような眩きを漏らす。

【最初は何させようかな…………とりあえず、蟹股になってドスケベに腰振りしてよ】

かくんっ♥ びくうんっ♥

「ひっ♥ なっ♥ なにっこれっ♥ 腰がっ♥ 勝手にいっ♥♥」

またしても意思に反して動く身体。人にはまず見せないであろう蟹股になると、腰を前後にカクカクと振りたく  
くってしまう。

短いスカートはめくれて下着が丸見えになり、震動は胸部にも伝わって大振りの爆乳がたわわに揺れる。

雄を誘っているとしたか思えないような淫らな踊り。

少年が言う『ドスケベ』そのものの動きに、ほまれは思わず性欲を煽られつつも声を荒げる。

「ちょっと♥♥ なんの真似よっ♥♥ こんなこと♥♥ させるなんてえっ♥♥」

【いやあ、慣らしとしてテキトーな催眠ただけなんだけど……思ったより効いてるね♪  
パンツ丸見えでおっぱいもぶるんぶるん揺れてるし、めっちゃくちゃエロいよほまれさん♪】  
ぶるんっ♥ びくんっ♥ ぶるうんっ♥

「みっ視ないでっ♥♥ 催眠なんてっ♥♥ あるわけないでしょっ♥♥ 早くっ♥♥ これ……とめてえっ♥♥」

【そんなこと言っただけで、ホントはほまれさんもドスケベダンスを視姦されて気持ち良くなってるんじゃないの？】

「なっ♥♥ そんなことっ♥♥ あるはずないっ♥♥ み♥♥ 視られて♥♥ 気持ち良くなんてっ♥♥」

【相当素質ありそうだけどね？ とりあえず写メるからイッてみてよ】

自ら淫乱ダンスに励み、性的快感を得てしまうほまれ。

これは間違いなく少年の能力によるもの。

しかし催眠術などあるはずがない。あるとして、自分がかかるはずがない。

ならば、何故——考える余裕もなく、少年が取り出す携帯端末に意識が向く。

当然、それにはカメラ機能も搭載されているだろう。

ただ情けない姿を視られ、辱められるだけならともかく、それを記録されれば想像もつかない被害が生じかねない。

今すぐ奪い取ってやりたい気持ちになるが、身体は蟹股腰振りに夢中で言うことを聞いてくれない。

たぶんっ♥ ぶるんっ♥

「こんな姿を撮るなんて♥♥ 正気じゃないっ♥♥ やめてっ♥♥ そんなこと——」

【撮られただけで触られたように感じる】

カシヤッ！

「あ♥♥ やめ♥♥ 撮らな……——っ♥♥♥♥」

（そんな♥♥♥♥ 撮られてるのに♥♥♥♥ イヤなはずなのに……イクううっ♥♥♥♥）

無抵抗なまま撮られてしまう——しかも直前に聞かされた言葉通り、

なぜか撮影された瞬間に光を浴びた部分が触れられたような感触に晒され、またも絶頂してしまう。

確かにほまれの身体は、触れられれば達してもおかしくないほど火照っている。

とはいえ撮影されただけで達するなど非常識……否、変態でしか有り得ないことだ。

口では懇願し、心の中では拒絶して踏みとどまろうとするが……

嫌悪も空しく、『催眠術にでもかかったように』あっさりと望まぬ快楽に呑み込まれる。

視姦に欲情し、撮影で達する。屈辱的な事態に腰を振りながら唇を噛むが、対する少年は残念そうな顔で自分の行いを悔やむ。

【あ、しまった。淫語を忘れてたよ……じゃ、次からイク時はアへ声と無様な淫語をお願いね♪】

「はあっ……♥♥ な、何よ今度は♥♥ あへ……？ そんなお願い、知らないわよっ♥♥ 早くっこれを解きなさ」

【触っただけでイク。ついでに、正直に気持ち良いわって白状する】

ばあんっ♥

「あっへ♥♥♥♥ 気持ち良いわっ♥♥♥♥」

少年は未だに腰を振り続けるほまれの後ろに立つと、派手に動く臀部——

フィギュアスケートで培った引き締まった筋肉に、思春期の発育による肉付きで理想のバランスと丸みを得て、更に下着に包まれることで形を強調し、振りたくられて迫力を見せる爆尻を、手のひらで力強く叩いた。痛みすら感じるほどの強い刺激。強制的に振らされている尻を触られる、というのもあり本来ならば快樂など感じるはずもないが……

やはり謎の効力が働いており、痛みが一瞬にして大きな快感に変換され、その瞬間には絶頂している。しかも少年の自分勝手な願望に従うように、無様な奇声と快感の自白をしてしまう。今まで味わったことのない屈辱感に襲われ、ほまれは少年を睨み直す……が、やはり淫ら腰振りは続けたままで、気丈な態度が逆に滑稽に映ってしまう。

【お一言言った言っただよ ♪ ほまれさん、やっぱり気持ち良くなってるんだね♪】

「い♥♥ 今のは♥♥ アンタがムリヤリ♥♥ 言わせただけでしょ……っ♥♥」

【まあね。でも今のはあくまで『正直な感情』を言わせただけだよ。

つまり、ほまれさんは催眠術でホントに気持ち良くなっちゃってるってこと♪】

「だから♥♥ 催眠になんか♥♥ かかってないって……ちょっと、今度は何を……っ♥♥」

【ドスケベダンスしてると挿れにくいなあ。一旦とまってよ】

「挿れるって……やめてっ♥♥ いやああっ♥♥」

ほまれの後ろに立つと、少年は目的の行為のために淫ら腰振りを止めさせる。

少年の目的は言わずもがな、挿入。セックス——否、レイプに及ぶことだ。

いよいよ最悪の行為がされそうになり、ほまれは必死に足掻く。

だが腰の動きが止まっただけで姿勢は固まっており、その場から逃げ出せない。

喉もすっかり発情しきって治まっておらず、悲鳴も甘ったるく媚びるような響きを生んでしまう。

嫌悪に隠された、密かな強姦欲求。それを見透かしたように、少年が肉棒を宛がい……

【よし、じゃあ挿れるよ……】

「待ってっ♥♥ それだけはイヤっ♥♥ よりによって……こんな真似する、アンタなんかにつ♥♥」

【でも、ボクたち付き合ってるんだよね？】

「……うん、付き合ってる♥♥ ……っ?! い、いや、違うっ♥♥ 付き合ってたんかっ♥♥」

【まあどう思おうと勝手だけど、イカないように気を付けてね。イッたら『正直』になっちゃうから♪】

「ひ、人の話を……♥♥ やめ♥♥ ダメ♥♥ あ……………」

ずっぽおおっ♥♥

「おほおっ♥♥♥ ちんぽっ♥♥♥

ちんぽで犯されてっ♥♥♥